東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

# IOG Annual Report 2023

東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

機構長ごあいさつ …… 01

IOGとは …… 02

IOGメンバー …… 08

リサーチビジョン …… 13

社会提言 …… 31

個別研究プロジェクト …… 33

個別研究プロジェクト
自治体等出向者のコメント …… 61

産学連携プロジェクト …… 67

産学連携プロジェクト
個別共同研究 …… 75

IOGの業績 …… 83

WINGS-GLAFS …… 103

イベント・インフォメーション …… 119

# 「幸福長寿と健康長寿」の両立を狙う
# ー産学官民協働で地域コミュニティのリデザインを

我々、東京大学高齢社会総合研究機構（Institute of Gerontology：IOG）は、分野横断型の学際的な総合知を活かし、全国の数多くのモデルフィールドを持ちながら、まさに社会地域連携を基盤とする課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を展開しております。少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社会の在り方をエビデンスベースの政策提言も行い、さらに、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指しております。

人生 100 年時代と言われる中で、日々の生活を通して、現役時代であっても、そしてリタイア後のセカンドライフ期においても、生きがいと幸せを感じることが出来るような人生を送りたい。これは、どの世代の方々にも言えることなのでしょう。言い換えれば、健康長寿を実現するだけではなく、そこには「幸福長寿」とも言える部分も不可欠なのであろう。そのために、今の時代に合わせた新たな自助・互助のスタイルのモデル化も目指し、それが軸となる地域づくりのデザインが全国でも展開され、個々の国民が生き切った人生を送れるようにするために、地域社会を実情に合った形で再構築していきたい。そこには「個」の視点と「地域」の視点、この両方の視点を考えながら、諸課題を一つずつクリアできるよう、豊富なエビデンスの下にモデル地域でのチャレンジを続けていく必要があります。それらを実現するためには、なぜこのような状況に陥っているのかという現状評価や課題認識、さらには仮説設定も当然ながら求められます。さらに、先を見据えた将来の未来ビジョンをクリアに描き、そこにエネルギッシュに推し進めていくパワーとパッションも必要なのでしょう。そして、このモデル地域でのチャレンジを「他の地域、他の自治体でも簡便に取り入れることができる、すなわち『汎用性の高いモデル』」の構築も強く求められます。

今回の「2023 年度活動」の報告書では、IOG がどのようにワンランク上の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を繰り広げることが出来たのか、どのようなインパクトのあるメッセージを世の中に発信できたのか、本報告書を作成しながら、機構長をはじめ全構成員で前向きに振り返ることができればと願っております。また、純粋な研究者の活動だけではなく、ジェロントロジー産学連携活動における底上げも強く期待しているところです。コロナ･パンデミックが落ち着き、2023 年 5 月 8 日から感染症5類になった年度であり、まさにジェロントロジー総合研究開発を質と量ともに加速させる時期に来ております。

最後に、IOG の地域連携は、アカデミアとしてすでに 100 か所を超える自治体との連携を行っており、研究者が集っているだけではなく、全国に数多くの行政メンバーや専門職種、そして一般地域住民も参画してくれております。機構長である私飯島が掲げた IOG のビジョンとミッションに対して、まさに「産学官民協働を軸とするジェロントロジー・ファミリー」によって確実に進めてきてくれております。それを改めて再認識できる報告書にもなっております。今後さらに超高齢社会の課題解決を多角的かつ立体的に取り組んで参ります。また、我々の研究成果をより多くの方々に知っていただき、一緒に考え、そして新しい日本を創る一助となれば幸いです。

東京大学 高齢社会総合研究機構 機構長
東京大学 未来ビジョン研究センター 教授
飯島 勝矢